

報告5 ひきこもり当事者のグループ活動について

○河合龍紀 河合恵美子

高林智子 鈴木若奈 二宮貴至

【はじめに】

浜松市では平成21年7月より、ひきこもり地域支援センターを開設し、これまでのひきこもり家族に対する面接相談に加え、訪問支援の機能を加え相談支援体制を充実させた。センターでは、まず家族による来所相談を受付け、必要なケースには訪問支援を検討して、支援につなげるという方法をとっている。訪問支援については、民間事業所に委託し、ケースごとに連携をしながら行なっている。ひきこもり地域支援センターを開設した平成21年度の相談件数は89件にのぼり、訪問については、10月31日現在で12ケースである。

平成21年11月からは、ひきこもり当事者の居場所づくりを目的に「当事者グループ」を月1回でスタート。最初は20代男性、女性1名ずつの計2名ではあったが、平成22年11月1日現在、10名が登録している。平成22年5月からはグループ名称を「ゆきかき」とし、グループ活動の回数を月2回に増やした。社会の中でどこにも所属することができず、支援が届きにくい、ひきこもり当事者への支援の経過とこれからの課題について報告する。

【目的】

ひきこもり当事者への支援について、グループ活動のあり方や今後の支援体制、今後の課題について検討する。

【方法】

ひきこもり当事者グループについて、以下の4点を検討する。

1. 当事者グループ「ゆきかき」の概要について
2. 当事者グループの参加者について
3. グループ活動からの発展
4. メンバーの変化について

【結果】

1 当事者グループ「ゆきかき」の概要について

このグループの名前である「ゆきかき」は、厳しい雪国で行なわれる「雪かき」を連想させる。高く降り積もった雪を掻き出す様子が、自宅の中から外へ出て行こうとする当事者の心情と重なる。しかしこの名称は略称であって、正式には「ゆきだるまとかき氷」である。ある当事者の一人による「冬の象徴のゆきだるまと夏の象徴のかき氷は同じ水が変化したもの。それを並べてみるのも言葉あそびのようでおもしろい。」という一言が決め手となった。以降、参加者の一人がイラストを描いて、キャラクターやロゴマークなどをデザインし、グループの名称として「ゆきかき」が定着した。

当初は月1回、午後2時から午後3時30分までの1時間30分の活動時間であったが、グループのメンバーが増える中で、メンバーから

回数を増やしたいとの意向があり、月に2回、午後の1時30分から午後3時30分までの2時間とした。これまでの活動については以下の通り。



図1 メンバーがデザインした「ゆきかき」ロゴマークとキャラクター

○これまでの活動内容

ゲーム（トランプやUNO）、クリスマス会（ケーキのデコレーション）、映画鑑賞（DVD）
社会見学（FMラジオ局「K-MIX」見学）、散歩（浜松城公園・静岡文化芸術大学）
調理実習（お菓子作り）、コラージュ、心理検査（TEG-II、バウムテスト） など

2 当事者グループの参加者について

現在、グループへ参加登録している当事者については、以下の通り。

性別	来所時の年齢	ひきこもり開始の年齢	来所時ひきこもり期間	不登校歴（～高校）	就労経験	受診歴・相談歴	アセスメント（分類）	最終学歴
男	20	15	5	○	×	○	発達障害	通信制高校休学中
女	21	18	3	○	×	○	その他	高校卒業
男	24	15	9	○	○	○	その他	大学在学中
女	24	22	2	×	×	×	その他	大学卒業
男	25	19	6	×	×	×	その他	大学中退
男	27	18	9	×	○	○	その他	高校卒業
男	29	20	9	○	○	○	気分障害	高校卒業
男	33	19	14	不明	×	○	気分障害	高校卒業
男	37	36	1	×	○	×	その他	大学中退
男	44	17	27	○	×	×	その他	大学卒業

※ 男性8名 女性2名 平均年齢27.2歳 平均ひきこもり開始年齢19.5歳 来所時の平均ひきこもり期間7.7年

3 グループ活動からの発展

(1) ひきこもり家族教室への参加

当センターでは、今年度ひきこもり家族教室を年2回（全4回コース）実施している。「ゆきかき」では、グループの活動やグループミーティングで話し合ったメンバーの気持ちを紹介したり、メンバーの一人が家族教室の中で体験を発表したりする場を設けている。

(2) ゆきかき通信の発行

今年の7月より「ゆきかき通信」を月2回発行。グループ活動後に書いた感想を掲載し、メンバーや来所相談の家族や当事者へ配布している。グループの活動やメンバーの気持ちなど発信するツールとなっている一方、対人関係に不安のある当事者にとっては、同じひきこもり当事者やグループの様子を知るための貴重な情報となっている。最近通信の編集などにも少しずつメンバーに参加してもらっている。

4 メンバーの変化について

「ゆきかき」がスタートして一年が経過し、少しずつではあるがメンバーの中にも変化が現れてきた。平成22年11月現在で、2名が就労、2名が内閣府の研修事業（注1）へ参加をしグループ活動から一時離れている。また参加が中断となっているメンバーも、教習所に通ったり、公民館のそば打ち講座に参加したりするなど自主的に活動しているようである。メンバーにアンケートという形でグループに参加してからの変化について書き出してもらった。グループの活動やメンバーとの交流を通して、少しずつではあるが他者の考えを知り、気持ちを理解しながら色々考えるようになったようである。

当事者アンケート「グループに参加するようになって」

- ・人とのつながりを断った生活をしていたので、まだまだ不安なところもありますが、この機会に忘れていた感覚を取り戻したいと思います。(20代 男性)
- ・他人との接触がない時は自分の中で思考がぐるぐるから回り回る感じで、一歩も前に進めない気がする。グループに参加して自分にはない考え、違う考えという刺激を受けるのは自分に変化する起爆剤になると思う。(30代男性)
- ・普段、ほとんど人と接する機会がないので、孤独感や不安があったりしたのですが、社会とまだかろうじてつながっているんだと少し安心することができました。(20代男性)
- ・他の人の存在、経験を知れたことで、何かが広がりそうに感じた。実際に、今仕事をしている人と直接話せて、成功例というか一人は抜け出してうまくやっていると知れたことが励みというか・・・ そう感じた。(20代女性)
- ・今参加すること自体は全然苦じゃないので、次のステップを意識しなくてはいけないのかな・・・とったりもしています。しかし今思い浮かんでいる次のステップはとても大きな一歩のように思えて「よし！次に行くぞ」と思えません。参加しないよりはいいだろうけど、参加していることに安心しているような気もして、「いかん、いかん」と思ったり、もうちょっと・・・と思ったりします。(同上)

【考 察】

現在「ゆきかき」に参加しているメンバーの多くは、面接相談等において家族へグループを紹介し、当事者本人が親とともに来所しグループへの参加に至っている。こうしたことから家族との交流があり、少しずつ何かをしなくてはという思いやエネルギーが出てきてはいるものの、自宅から出て再度就学や就労などに至らない当事者はまだ数多くいると考えられる。

グループが始まって1年を迎え、今後の課題として考えられるのは、メンバーの声にもあった「次のステップ」である。自宅から出て、グループには参加できるようになったが、グループの中でひきこもっていても本当の解決にはならない。まだ20代、30代の若者にとっては、就労などさらに個別の支援が必要になると考えられる。そうした機能については、今後関係機関と更に連携を深めていく必要性を感じる場所である。新たな資源につないだり、居場所として通えるところが地域に増えたりすることで、当事者たちのその先の選択肢は増えていくのではないだろうか。そうした仕組みの中で当センターの「ゆきかき」は、自宅から社会への「入口」として、家族相談と並行しながら、当事者や家族の初期的な支援を行なう役割を担うことができるのではと考える。

これらの考察から、「ゆきかき」のひきこもり当事者グループとしての役割について以下の通りにまとめる。

- ① 家族以外の誰かとの接点であり、社会の一部への所属感を感じられる場
- ② 個々の目標設定と自己実現の場
- ③ ひきこもり当事者やそのご家族への情報発信
- ④ 「ひきこもり」という自身の経験を活かすことができる場

(注1) 内閣府事業「三遠南信地域社会雇用創造事業～社会的企業人材創出・インターンシップ事業～」内閣府の「地域社会雇用創造事業」の採択を受けた事業。地域の社会的企業を支える人材育成を目的に①自然資源分野、②地域づくり分野、③安心安全分野におけるインターンシップ（職場体験）研修を実施する。